

# 浄土

monthly JODO

2015  
January

1



2015年 浄土「表紙」

新年号

# 靴

アップの写真なので判りにくいですが、この靴の陶芸は二足いっぺんにひとつの掌にのるほどの大きさ。とても小さくて可愛い作品である。ズックという言葉はもはや死語に近いが、そのズックを履いていた中学生や高校生のころ、多くの人が経験のある場所に穴があいている。足の親指の付け根にあるちょっとした骨の突起が擦れて布靴が摩耗し、穴があくのである。

日本では明治まで一般に靴を履く習慣がなかったが、欧米では、人間と靴の関係は古く、2008年、アルメニアの洞窟で発見された紐靴は、紀元前3500年ごろの物と推定されている。

西洋には昔から「おしゅれは足元から」などという慣用句がある。日本語にも「足元を見る」という言葉があった。旅人の足袋や草履といった履物を見て宿泊客の経済力や地位を見たのである。履物のグレードや種類は、使用者の富や権力の象徴とされたのである。

(文・佐々木美冬)

陶芸家  
南  
初枝  
の  
作  
品

撮影・芝崎慶三

東京・目黒  
ゆうれんじや

# 西蓮社

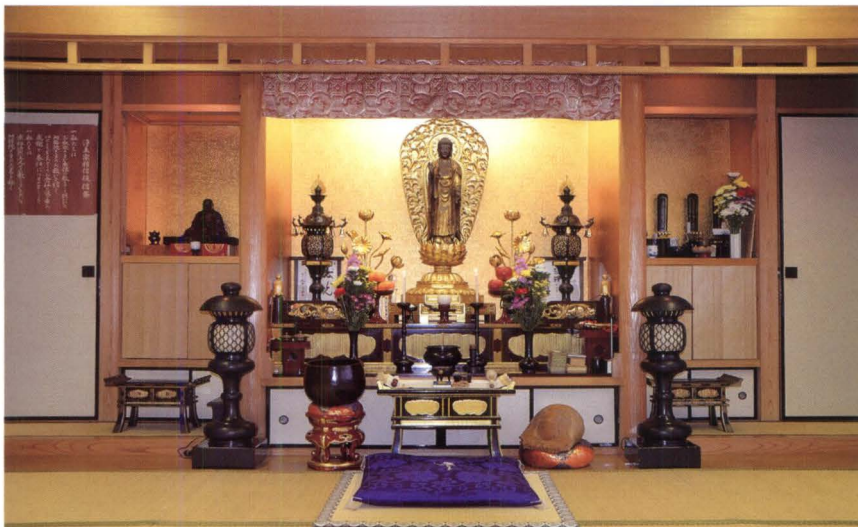
寺に歴史あり  
人々に信仰あり  
日本の  
心の故郷を紀行する

# 寺院紀行



住宅地にある西蓮社と青木照憲住職と奥様の玲子夫人





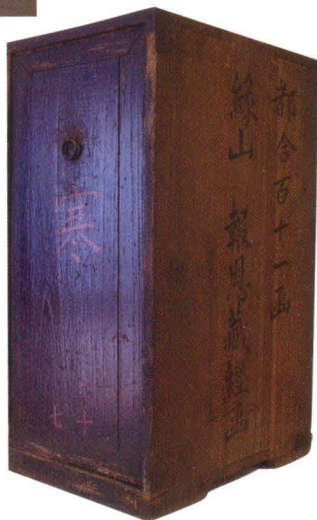
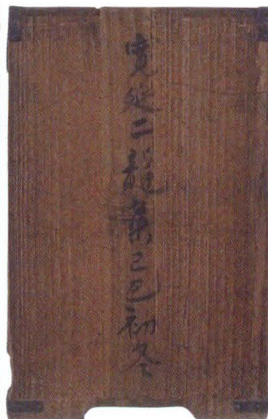
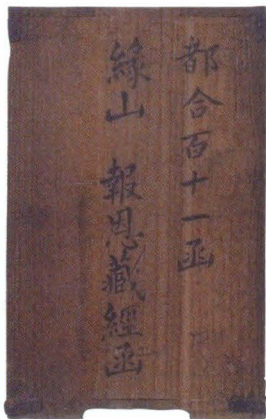
西蓮社の二階にある内陣と  
本尊の阿弥陀如来立像

西蓮社蔵の明版大蔵經。増上寺で学  
ぶ多くの衆学僧が手にした価値ある  
經本だ





平成26年11月、京都は大沢池前にある佛敎大学宗教文化ミュージアムで「近代の大蔵經と浄土宗」一縮刷蔵經から大正蔵經へ一と題された秋季特別展。西蓮社蔵の明版大蔵經が出展された



西蓮社蔵の大蔵經は寛延二（1749）年に納められ、全部で百十一函で二千冊を超える經本が箱書されている

西蓮社蔵の大蔵經の中の阿弥陀經の頁



芝公園時代の西蓮社境内にあった報恩蔵。膨大な大蔵經は収めるにも大きな蔵が必要だった

地下ホールの脇に造られた納骨堂。  
下が「青蓮」、その下が「白蓮」入  
口で右横がその内部



半地下となっているホール。  
ここで各種催しが行なわれる



入り口を入ると趣のある  
庭園となっている



本堂と隣り合う客殿。襖をはずせば  
広い空間が生まれ、念仏会などにも  
利用されている

# 浄土

2015/1月号 目次

|                             |              |    |
|-----------------------------|--------------|----|
| カラーグラビア寺院紀行 東京 目黒 西蓮社 ..... | 写真＝真山剛       | 1  |
| 連載 法然上人のお言葉⑨ .....          | 梶村 昇 英訳 河西良治 | 6  |
| 滝田栄インタビュー 祈りの心を形にする .....   |              | 8  |
| 寺院紀行 東京 目黒 西蓮社 .....        | 真山 剛         | 16 |
| 連載 響流十方 .....               | 小村正孝         | 24 |
| 連載 会いたい人 桐竹勘十郎さん③ .....     | 関 容子         | 28 |
| 連載 友好の絆⑧ .....              | 森 清鑑         | 36 |
| 連載小説 渡辺海旭⑤⑤ .....           | 前田和男         | 42 |
| 連載 誌上句会 .....               | 選者＝増田河郎子     | 52 |
| 連載 マンガ さっちゃんはネッ .....       | かまちよろう       | 55 |
| 編集後記 .....                  |              | 56 |

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏＝表紙の言葉

背表紙裏＝連門句会



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

# 法然上人のお言葉

## ご法語

本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助<sup>すけ</sup>をささぬなり。  
助さす程の人は、極樂の辺地に生まる。助と申すは、智慧  
をも助にさし、持戒をも助にさし、道心をも助にさし、慈  
悲をも助にさすなり。

(禅勝房伝説の詞)

現代語訳―阿弥陀仏の本願である念仏は、それを申すだけで往生できるという  
独立した教えであつて、念仏以外の助けを必要としないものである。助けを必  
要とするような人は、極樂でもその辺地に生まれる。助けというのは、智慧を  
助けにしたり、戒律を守ることを助けにしたり、道を求める心を助けにしたり、  
慈悲の心を助けにしたりすることである。

### Honen Shonin's Sayings

The nembutsu in Amida Buddha's Original Vow stands on its own as an independent doctrine which proclaims that the utterance of Namu Amida Butsu alone is necessary to go to the Pure Land. No other aids are required for it. Those who need such other aids are born far away in the land. What I mean by the aids are their wisdom, their observance of precepts, their aspiration for enlightenment, and their compassion. (*Zenshobo densetsu no kotoba*)

## 解説

法然上人が学んだ比叡山は、天台の教えだけではなく、真言・戒律・浄土・禅の教えもありました。しかしこの四つの教えは、天台の教えに到達するための補助の行であって、いわば天台の教えの居候的存在、寓宗といわれておりました。

たとえば浄土の教えである念仏は、心を一つに定めるという天台の教えの準備の行であって、念仏だけ申せば救われるというものではありませんでした。それを法然上人は、念仏は阿弥陀仏の本願であって、念仏を申せば救われるという独立した教えであることを、伝統の仏教教学によって明らかにしました。浄土教はここで初めて独立した教えになったということです。

ここに言う「ひとりだち」というのは、それだけで救われる独立した教えということであって、他の教えの助けになったり、他の行の助けを必要としたりするものではないということです。智慧も、持戒も、道心も、慈悲の心さえ助けとする必要はないと上人は述べております。

### Commentary

When Honen studied in Mt. Hiei, there were four teachings other than Tendai: Shingon, Kairitsu, Jodo and Zen. But these four teachings were subordinate exercises to get to the final goal of Tendai, so they were called the Gu sects, which referred to Buddhist schools dependent on the teaching of Tendai.

For example, the nembutsu in the teaching of Jodo in those days was a preparatory practice to fulfill the goal of Tendai, which was the mind in meditation, that is, the mind focused on a single thing, so it was not supposed that the nembutsu could save people by itself. Then Honen made it clear in terms of traditional Buddhist doctrines that the nembutsu was Amida Buddha's Original Vow and that it was an independent doctrine manifesting that its utterance could save people. In this way the Pure Land Buddhism became an independent teaching for the first time at that time.

The expression "stand on its own" in the above quotation indicated the independence of the nembutsu which assured people that it was sufficient for them to be saved, so that it neither became any help to other teachings nor needed any helps from them. Honen stated that it did not need any wisdom, any observance of precepts, any aspiration for enlightenment, or even any compassion.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

# 祈りの心を 形にする

## 第一回

# 滝田 栄

インタビュー

たきた・さかえ

一九五〇年千葉県生まれ。文学座養成所から劇団四季を経て独立。

舞台『レ・ミゼラブル』の主演を十四年間つとめたほか、『リア王』で成功。

TV『草燃える』『なっちゃんの写真館』『徳川家康』『マリコ』などの大作ドラマで活躍する。

一方『料理ハンザイ』の司会を二十年間つとめた。二〇〇六年、映画『不撓不屈』で主演。

〇六、〇七年奈良薬師寺の伎楽『三蔵法師求法の旅』で三蔵法師役を演ずる。

俳優の仕事のみならず、執筆、講演など幅広く活躍。

座禅、朝粥の会を主宰するほか、抜刀術（戸山流）、山歩き、陶芸も好む。現在は映像制作に邁進中。

聞き手 本誌編集部 佐山哲郎

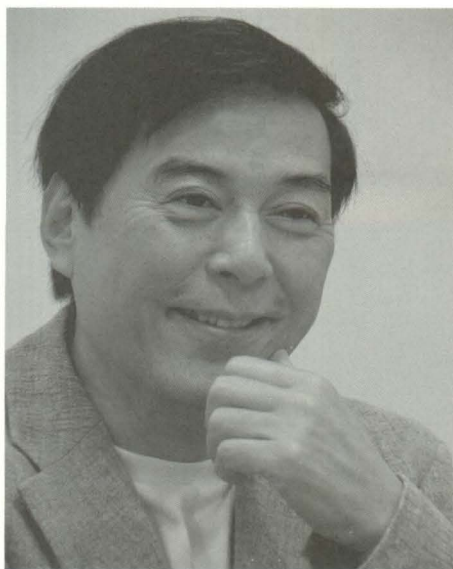
**編集部佐山（以下S）** 毎日新聞社刊行の『滝田栄 仏像を彫る』というご著書を拝読させて

頂いて、感動いたしました。奥付を拝見しますとこのご本は二〇〇七年初版。それから現在まで長期に涉つてゆつくりと増刷されています。これは、本に実力が備わっている、ということ。ロングセラーといつてもいい書物ですね。ところで仏像を彫るきっかけがご母様が亡くなられたことだとあります。彫られたのは観音様で、最初から素晴らしい作品になっていますよね。もともと美術の才能がおりになったのですか。

**滝田（以下T）** いえいえ。僕は小さいときから不器用で、図工はどちらかといえば苦手でした。

**S** 絵についてはどうだったんですか。

**T** 絵はちよつと描きます。僕が生まれる前、戦争中ですが、父の家というのが結構大きな家だったので、困窮されていた絵描きさんがおられて、母が面倒をみたというか「家に住んだらどうですか」ということで。子供だった長男が、その先生が絵を描きに行くときに「一緒に行きなさい」と。最初は。長男は絵が得意だったものですから。それで僕も絵が好きなものですから、小学生になると、僕がついていった。有名な画家だったんですね。「教えて貰いなさい」と母に言われて。日曜日はいつも写生に行つて、雨が降った日は家で静物画を描くんですね。



S お母様は個性的な方だったようですね

T 昭和の肝っ玉母さんというような、ね。ほんとに。気持ちのいい、まっすぐな、スカッとした女性で、僕たちを一生懸命育ててくれて、教えてくれて。貧しい時代だったから自分は学校は出ていないんですけど、

S 和裁を教えていらっしやったんですね。

T ええ。母の実家は織物の事業をしていた家なんですけれども、時代に乗り遅れちゃってダメになっちゃって、尋常小学校を出たら奉公に行きなさいと言うので、当時、神田の清水という東京の百貨店なんかの高級呉服を全部扱っている、そういう職人集団の中に入られたんだそうです。大変頑張って、努力をして、あつという間に職人頭になって、縁あって父と結婚することになったときにも、惜しがられて、東京に家を準備するから仕事を続けてくれないかと言われたくらい腕のいい職人だったんだそうです。でも、結婚して東京を離れて、千葉に帰ったんですけど、たいへんな腕ですから、千葉でも人を集めて。

S 百人からの人を使っただけなんです。

T 常に百人からの職人さんを集めて、三越、伊勢丹、僕が生まれる前は白木屋、そういう百貨店の高級呉服ですね。

S 手に職のある、元祖キャリアウーマンですね。一方、お父様は国鉄の。

T 父は真面目な国鉄職員で一生国鉄に勤務して（笑）。

S ご両親ともに、とても個性的で、お母様が病氣されたときに励ましたという言葉がいいですね。

T 寡黙であまり話をしない父だったんですが、母が心臓を悪くして、目を痛めたときに、

もしかしたら失明するのではないかと。そのとき、「心配するな。俺が目になってやるから」と。あれはねエ、ぐっときましたねエ（笑）

S 普段は寡黙なお父様が、おっしゃったそうですね。泣かされました。

T とっても人間的な集団なんです、我が家は（笑）。母の教えといいますが、繰り返して言っていたことは、「勉強しなさい」とはあまり言わなかったんですが、いやときどきは言いましたけど（笑）。「自分が本当に好きなことをみつけないさい。これが心から好きだと言うことを探しなさい。もしみつかったら、人の十倍努力しなさい。好きなことなら十倍でも、百倍でも努力が出来る」っていうんです。だからうちの兄弟は全員違う方を向いている（笑）。

S 上のお兄さんは有名な陸上競技の。

T ええ、四人兄弟なんです。男三人、女一人。僕は四番目です。長男は陸上競技で、十五歳で早くに逝っちゃったんですけれど、増田明美さんを育てたんです。優秀な子を見つけてきて自宅で一緒に生活して育てるんですよ。最初に世界レベルにいったのが女子マラソンの増田明美ちゃん、最後がハンマー投げの室伏広治。あと、その妹の由佳さんもお父さんの重信さんに頼まれて、「陸上競技に向いてると思うんで、しっかり育てて欲しい」というので、兄が高校三年間、寝食を共にしたんです。

S 同じ陸上競技でもマラソンとハンマー投げってすごく違う競技ですよ。

T 兄は、自分では一番地味な投擲競技なんです。

S 砲丸ですか。

T そうなんです。それまでは円盤投げや砲丸投げは絶対日本では勝てないといわれてい

たんですね。無理だと。それを兄は「絶対にいける」と。確信があったんですね。あと、あらゆる種類の選手を見いだす努力をしてたんですね。まあ、一種の伯楽といえますか。

S いや名伯楽です。そういう「見る力」があるんですね。そういう才能を見つけて、過酷ともいえる練習で絞り上げる。

T そう、殺されるんじゃないかと思ったのでは（笑）。だって、あの室伏君を張り倒すくらいなんですから。

S 子供の頃、近所に火事があつて、飛び込んでいつて子供を救ったとか、溺れてる子がいたら、それも飛び込んで救う。体の方が先に動いてしまうような方なんですよね。

T ほんとに正義感が強くて、後先考えずに飛び込んだじゃう。子供を抱えて、こちらはどうビックリして。

S そういうスパーマンみたいなお兄さんがいるかと思えば。

T 全員違うんです。次男は非常に知的で、っていうと長男があれなんですけど（笑）、技術者でして。

S 理系の方なんです。でも滝田さんは中央大学文学部。

T ほとんど大学行ってないですけど。

S あの頃、まともな、明るい楽しいキャンパス生活ないですものね。二十五年生まれですよね。僕は二年上で、僕らの世代が大学というものをメチャクチャにしたあと（笑）。俳優になろうと思ったのは、その頃でしたか。

T 久し振りに行った授業で、隣に座った人に昨日観てきた映画の話をしたら、「君は俳優になるべきだ」って言われて、そのときから始まったんですよ。

S 見てきた映画の話を克明に話したんですか。

T 『アラビアのロレンス』なんです。テアトルで観て感動しましたね。それまで全然演劇に興味もなかったし、演劇の知識もないし、関係のない世界だと思っていたんですよ。それが、もの凄い大きなスケールのドラマで、人間の生き様がカッコ良くて、それを友人に話したんです。

S オマー・シャリフとピーター・オートウールの出会いの場面とかね。

T そうなんですよ（笑）。

S それひとつで演劇に行くっていうのも凄いですよね。

T まァ、いい加減な時代だったというか（笑）。

S それで取りあえず文学座に行こう（笑）と。同期の方はどういう方でしたか。

T 僕たちのときは不毛（笑）でして。私がいるくらいですから。いま現役で頑張っているのは、私と、角野卓造君くらいかな。一年下に中村雅俊君とか、桃井かおりとか、松田優作とか、あとからゾロゾロ（笑）。活躍する人が出てくるんですが。それまではコツコツ、コツコツ、地味に（笑）。

S とところで、滝田さんっていうと、お料理番組の印象も強いのですが。

T テレビでドラマを何本かやって、そのあと料理をやらなかったって言われたんですよ。嬉しかったですね。それまでアルバイト三昧の生活で、アルバイトしないと生きていけない、喰っていけない状況でしたから。嬉しかったですねえ。たまたま、山登りをやって、料理が好きで。趣味ですけどね。向こうも僕が料理を好きって知らなかったらしいんですよ。

S 成田高校山岳部ですものね。山男は案外料理が得意。それを知らずに、偶然に。

T 偶然ですね。それが、始めたら二〇年もやっちゃいましたからね。雪印さんの食に関する事故があつて、それが二十年目だったんですね。

S あれは大変でしたね。

T ほんと突然きましたからね。

S 報道というより、ただひたすらバッシング。

T メディアのね、付和雷同というかワツと乗る。つぎになんか出ると、またそつちにワツといくつていう。メディアに振り回されちゃうんじゃないですかね、人の心みたいなものが。その頃からですよ、ほんとの人の心とはとか、マスメディアとかの流れの中で生きていく生き方。ありますよね、決して原発については口に出さないとか。政治には口を出さないとか。業界の約束みたいなのがあつて、逆にそのコマーシャルに乗ると巧く行くみたいなところもあったり。する。僕、そういうの絶対嫌で。自分の本当の言葉ってどこにあるんだろうって。自分の思いですよ。真剣にそういうことを考え出したのが、あの雪印の事件というか、事故でした。きっかけになりましたね。

S 生来、何かを突き詰めて考える性格、相当に真面目なんです。

T そんなことは。

S 舞台が始まると、舞台と自宅あるいはホテルの部屋だけを往き来する、何処にも寄らない。なんていうことも書いていらつしやる。

T 不器用ですからね。集中しないとできないんですね。極端に集中しないと。それが真面目に見えちゃうのかもしれない。

(つづく)



# 寺院紀行

東京・目黒

## 西蓮社

ゆうれんじや

文・撮影／真山剛



都立大学から商店街を抜け、住宅地に入り少し歩くと左手に西蓮社が現れる。青木住職が40歳の時に建て替えている

浄土宗のお坊さんになるには、京都・東山の総本山知恩院または東京・芝公園の大本山増上寺で、世間から一切遮断された三週間の最後の修行を受けなければならないという。そして、「成満」じょうまんと読む「合格」をして、浄土宗の僧侶となることができるという。この最後の修行は特別に「加行」けぎょうと呼ばれ、知恩院と増上寺で毎年十二月に行っているということだ。

「昨年の加行で甥が無事僧侶になりました。この西蓮社を新しい時代に対応できる寺院として、彼にその法灯を継ぐのが私の使命だと思っています」

こう語るのは、この月刊誌『浄土』の編集スタッフの一員であり、同時に本誌発行元の法然上人鑑仰会はつねんしやうかいのHPなどIT関連を担当する青木照憲西蓮社住職だ。

そう、今回は初の編集部員のお寺訪問となった。

青木住職のお寺は渋谷から横浜へと延びる東急東横線の都立大学駅にある。駅から歩いておよそ10分、住宅地のまさにまん中に、高級屋敷と見間違う外観で建っているのが西蓮社である。

「毎日前の道を通っていても、お寺と気づかない方が多かったでしょう。今は納骨堂の案内看板や各種行事を行っていることもあり、地元の人にはお寺として認知されているはずだ」

そう、実は西蓮社はこの2年で大きく変わったという。この2年



昭和49年に開かれた「増上寺と徳川展」で西蓮社蔵の大蔵経が展示された時の案内札（左）と記念切手

に大きな行事を4回開催、その内容は西蓮社の歴史を繙き、同時に西蓮社のこれから伝えるメッセージそのものとなっている。ここにその行事内容を記そう。

【寺院文化再発見2013】——大本山増上寺山内寺院・西蓮社  
第一回御開帳記念（平成25年7月27日）

「西蓮社蔵 明版大藏経『御開帳』と『悠久の時』講演」  
「記念コンサート」「終活講演セミナー」

【寺院文化再発見2013】——晩秋のお寺へ出かようフェスタ！  
第二回御開帳記念（平成24年11月23日）

「経典御開帳&琵琶デュオin西蓮社」「明版大藏経御開帳」  
「薩摩琵琶演奏会」「個別終活相談会」

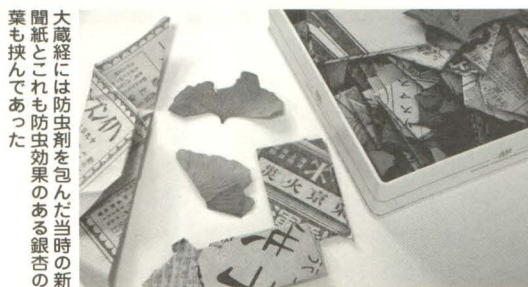
【寺院文化再発見2014】——大本山増上寺山内寺院・西蓮社  
のお寺deフェスタ！ 柿の木坂御廟落慶記念 春  
第三回大藏経御開帳 平成26年3月29、30日

「大藏経から見た江戸の仏教」「落語で見る仏教」

「お坊さんの新エンディング」「ピンシャン元氣コンサート」

【寺院文化再発見2014】——大本山増上寺山内寺院・西蓮社 秋  
のお寺deフェスタ！ 柿の木坂御廟建立記念  
第四回大藏経御開帳（平成26年9月23日）

「馬頭琴来日公演in西蓮社」



大藏経には防虫剤を包んだ当時の新聞紙とこれも防虫効果のある銀杏の葉も挟んであった

「お寺ってなあに？」やさしい仏教トーク・トーク開催！」

まず共通する「御開帳」が目を引く。そう実は昭和51年に青木住職の奥様の父親、前田成慧、先々代西蓮社住職の実家である三田の龍源寺に移した明版大蔵経が平成18年に西蓮社に戻ってきたのである。昭和58年に西蓮社の住職となった青木住職にとってはこの数千冊に及ぶ經典との初のお目見えだった。そして、その經典を一冊一冊丁寧に整理したのが、青木住職の後継者となるべく増上寺で加行を成満された、奥様の姉の長男である細川聡洋師だった。

青木住職は昭和23年に熊本で公務員の長男として生まれた。大学入学と共に上京、建築関係の仕事につき、西蓮社の三女前田玲子さんと結婚。29歳から僧侶の資格を取り始め4年後に住職となった。しかし、芝公園から目黒への移転を始め、昭和30年から住職として西蓮社を支えてきた先々代の前田成慧住職が遷化、お寺のことを教えてもらう機会がなかった。それゆえ、この大蔵経の存在も知らなかった。しかし、増上寺所蔵の大蔵経を研究する東洋文庫の會谷佳光研究員からの一本の電話に端を発し、西蓮社所蔵の明版大蔵経の成り立ちや存在価値に驚かされることになる。昨年11月には京都の佛敎大学の施設で公開され、西蓮社の大蔵経が一般公開され、シンポジウムも行われる大きなイベントだった。

手元にその會谷氏が編集者、青木住職が発行者となり平成24年9



都立大学駅は渋谷から約10分の住宅地だ

月に発行した『旧三縁山増上寺山内寺院・報恩蔵 西蓮社志稿』がある。この発刊の辞で青木住職がこう述べている。

「この書物は西蓮社の至宝であり、住職として誇らしく思うと同時に、西蓮社護持発展の礎にならんことを心から願っております」

では、この本から西蓮社の成り立ちとその役割を抜き書きしよう。

「寛延3（1750）年、増上寺境内の南東の角に貫蓮社練譽雅山が学徒策励のため報恩蔵を建立して明版の一切経を納め、伝来の西蓮社<sup>しんれん</sup>と譽聖<sup>しよせい</sup>岡の影像を本尊として西蓮社と名付けられた。明和9（1772）年までには堂舎が建立完備され、当時の増上寺第48世の到蓮社典譽智瑛を開山として、浄業修行の香衣別院に定められた」

当時、増上寺には三千人を超える所化衆<sup>しよけしゆ</sup>と呼ばれる修学僧がいた。

増上寺には徳川家康から寄進された高麗版、宋版、元版の三大蔵經があるものの、これらは寺宝として厳格に管理され、修学僧が閲覧できるものではなかった。そこで、修学僧の中でも階級座次の頂点にいた雅山が明版の大蔵經を手配し報恩蔵の建立を願い出て、西蓮社の誕生となったのである。ちなみに報恩蔵という名称は法然上人が20年間籠って浄土宗開宗の道を見出した比叡山青龍寺にある蔵蔵の名前だそう。そしてまたその法然上人の教えを浄土宗という一教団として世に知らしめた浄土宗第七祖聖岡上人の僧名である西蓮社を寺名としたのである。

春のお寺deフェスタで「お坊さんの新エンディング」講演をする戸松義晴師。西蓮社と同じ芝組心光院の住職だ

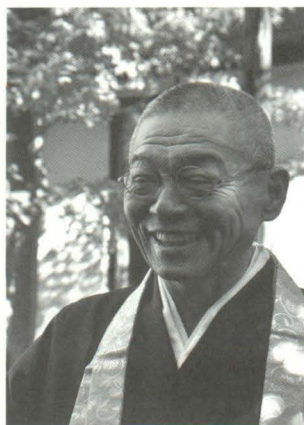


当時、この新しく建立された西蓮社の存在意義は大きかったに違いない。江戸時代には浄土宗僧侶になるには関東にある檀林と呼ばれる18の特別な寺院で27年間勉強する必要があった。書き出しで京都知恩院と東京増上寺と書いたが、江戸時代は増上寺を筆頭とする関東十八檀林に限られていた。その首座にあったのが増上寺でその修学僧層が手にした經典が西蓮社の大藏経だったのである。

こうした歴史的事実を知り、縁あって自分が住職となったお寺の成り立ちや大藏経を広く知らしめること。そしてその由緒ある寺院の法灯を護っていくことが自らの使命とし、その第一歩を西蓮社というお寺を地元の人へ知らしめることであり、それがこの連続御開帳の主旨である。

また、併催する行事内容を見ると青木住職が目指す西蓮社のこれからの姿も見えてくる。

先の行事内容にも記されているように、平成24年の柿の木坂御廟という納骨堂の新設、各種コンサートや古典芸能、終活やエンディング講座、仏教入門講座……、すぐ隣のお寺として来てもらいやすい内容になっている。地域密着の寺が青木住職の目指す西蓮社だ。さて話は遡るが、この地への移転は東京オリンピックを控えた昭和38年に境内地を首都高速道路用地として売却せざるを得なくなったのやむない移転だった。移転前の西蓮社は増上寺境内にあったが、



笑顔が魅力な青木住職は昭和23年7月の熊本生まれ

その周辺もすべて浄土宗寺院で徳川家の將軍や正室などの位牌所などを護る寺院、修学僧の学寮から寺になった寺院など特殊な寺院ばかりで、いずれもが墓地のない檀家や信徒のいない寺院である。

徳川幕府が確立させた寺請制度が現在の檀家システムに繋がるが、増上寺の境内に建てられた寺院はこうした一般的な寺院とはいふ異なる。全国各地、宗派を問わず、こうした大寺院の境内地に建立された特別な役割を持つ寺院はあるそうだが、増上寺境内地の50近くもあった寺院は中でもとても特殊な寺院だという。そして西蓮社もその筆頭で、青木住職になるまでは檀家や信徒がない、布施という収入のない寺院だったのである。それでは西蓮社を始め、こうした寺院はどうやって維持されているのか。住職が勤めたり、あるいは立地を活かした収益事業で維持しているという。確かに芝公園は港区でも一等地、境内地の活用は難しくはないだろう。しかし、西蓮社はその芝公園の地を離れ、目黒区の住宅地にある。となると寺院護持の方法を考えなくてはならない。

そこで、青木住職は15年前から地元の葬儀社と提携、半地下にあるホールを斎場として利用したり、葬儀での読経も引き受けてきた。それが平成24年の納骨堂新設へと繋がり、檀信徒に支えられるお寺への揺るがない一歩となったのである。

取材で拝見した納骨堂「青蓮」は既に一杯。新たに納骨堂「白蓮」



庭園を通り入る玄関には応接の椅子が並ぶが、その奥もちよつとした庭園になっている

を造り、常駐の担当者が案内をしている。

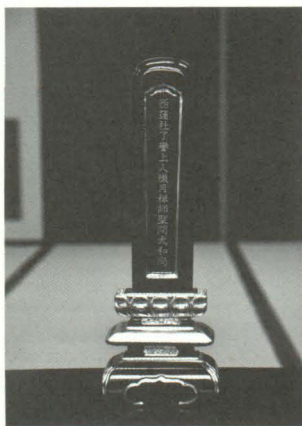
「時代の流れもあり、こうした形態の墓苑を望む方も多くなっています。近隣の方が近くてお参りしやすい墓苑として縁を結んでいただくなど、新しい西蓮社の一步を無事に踏み出しています」

この寺院紀行でも取り上げたが、実はロッカー型の墓の歴史は古く、昭和30年代初頭に遡る。当初はかなり斬新な墓苑だったが、今では宗派、地域を問わず多くの寺院が取り入れている。一方、散骨や樹木葬といった墓を持たない人が増えたり、僧侶による読経や引導がない直接火葬という葬儀式も増えている。寺院も大変な時代を迎えているのは間違いない。

「いつの時代でも流行や変化はありますが、法然上人の教えも既に800年を超えていながら、今この瞬間も多くの人々に来世への安心感を与え続けています。私は実業の世界に50歳まで身を置きましたが、法然上人の教えに救われる人が尽きることはない、と実感しています」

青木住職の後継者となる細川師も大学卒業後に営業という仕事を経験されての出家だという。浄土宗僧侶の多くの学びの拠点であった西蓮社は青木住職のもと、目黒の地で新しい時代を迎えている。いや、切り開いている。

(ルポライター)



寺名となった浄土宗第七祖の西蓮社了譽上人織月禪師聖岡大和尚の位牌

南無阿弥陀仏というは、別したる事には思ふべからず。阿弥陀ほとけ我をたすけ給えということばと心得て、心には阿弥陀ほとけ、たすけ給えと思ひて、口には南無阿弥陀仏と称うるを、三心具足の名号と申すなり。

(法然上人『つねに仰せられける御詞』)

「南無阿弥陀仏」については、別段難しく考える必要はありません。「阿弥陀さま、どうかこの私をお救い下さい」という言葉と心得て、心には「阿弥陀さま、お救い下さい」と思ひ、口には「南無阿弥陀仏」と称えることを「三心が具わった名号」というのです。

阿弥陀さまのお誓い — 「助け給え、阿弥陀仏」 —

あけましておめでとうございます。新しい年が、皆さま方にとって幸多く、そして、平和で安らかな世の中になりますように祈念申し上げます。

昨年十一月二十二日午後十時頃、長野県北部で最大震度六弱を記録する大きな地震がありました。長野市や白馬村など県内で計四十一人が負傷し、住宅五十四棟が全半壊しました。そんな記録的な大地震に襲われ、倒壊した家屋の下敷きになる人が相次いだにもかかわらず、奇跡的に犠牲者は一人も出ませんでした。特に、二十七棟が全壊するなどとても甚大な損害を蒙った白馬村では、住民同士の強いつながりによる助け合いによって、たくさんの方が救われたという報道は、実に心温まるものでした。

「ドーン」。22日午後10時8分、地震発生時、堀之内地区の自宅で寝ていた無職、吉沢淳俊さん（80）は、下から突き上げるような揺れで目が覚めた。その直後に屋根が崩落。両足から腹部を挟まれ、身動きが取れなくなった。辺りは停電で真っ暗。「助けてくれ」と叫び続けるしかなかった。（中略）救出後、村内の親類宅で一晩を明かしたという吉沢さんは毎日新聞の取材に、「近所の方々に助けてもらって本当に感謝の言葉しかありません」と、疲れ切った様子で話した。（毎日新聞11月23日）

地震の直後、会社員柏原一男さん（49）は、長男（15）が「向かいの家がつぶれてる！」と叫ぶのを聞いた。外に出ると、はす向かいの平屋建て住宅が崩れ落ちていた。「助けて」。がれきの中から悲鳴が聞こえ、間もなく、女兒（3）が建物の隙間から、はい出してきた。たまたま近所にいた男性消防士ら近隣住民5人が集まり、男性消防士が建物の中に上半身を突っ込み、チェーンソーを使ってがれきをどけていった。住民らは「大丈夫か、今助けてやるぞ」と声をかけた。約30分かかって、中にいた男児（2）と女性3人をみなで救い出した。（読売新聞11月24日）

こうした住民相互による救出活動が力を発揮したのは、新潟県中越地震を受けて白馬村の自治会組織が作成した「災害時住民支え合いマップ」のおかげだといえます。自治会では、緊急時に備え、そのマップを毎年更新し、高齢者等の要助者がいる住宅がどこにあるのかを予め調査していたことから、住民が高齢者宅に真っ先に救助に入り、到着した救急隊にも的確に場所を伝えることができたのです。現代社会、特に都会では、隣の住人の顔を見ることがない人も多いといえますから、そうした「支え合いマップ」の作成は困難かも知れません。しかし、そうした現代社会だからこそ、全国の自治会において、少しずつ

つではあっても、私達一人々々の「助けて！」という叫びを聞き漏らすことがないような「支え合いマップ」の作成を着実に進め、人々が皆、幸多く、平和で安らかな日々を送れるよう努めたいものです。

その一方、どれ程科学が進歩しようとも、いつどこでどんな天災や人災が私達を襲うかを正確に予測するのは不可能なことです。そして、地域社会の人々がどれ程素晴らしい互助組織を構築し得たとしても、被災を皆無にするのもまた不可能なことです。なぜなら、法然上人がおっしゃるように、やはりこの世は苦しみ多き穢土であり、私達は力弱き存在に他ならないからです。

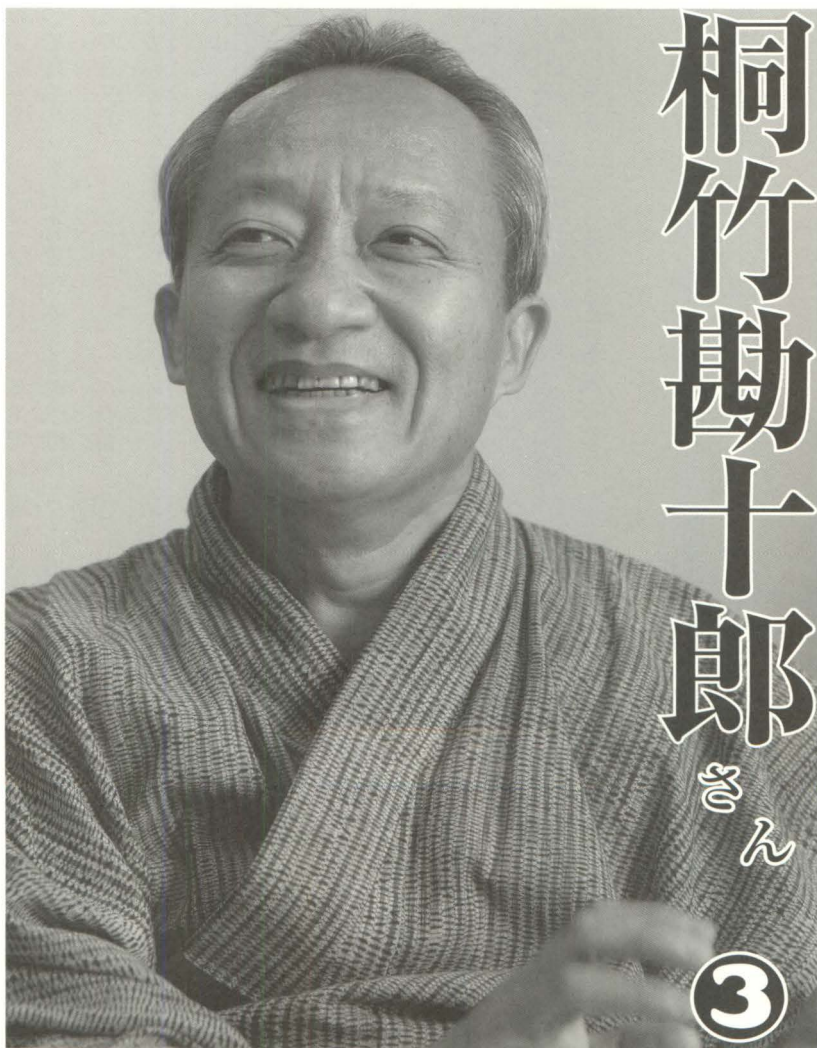
だからこそ阿弥陀さまは、そんな私達を哀れんで、「我をたすけ給え」との思いで念仏を称えれば、必ず汝を救い導こう」とお誓いになり、極楽浄土を建立されたのです。この世が穢土である以上、人と人との約束が守られないこと、「助けて！」という叫びを聞き漏らしてしまうこともあるのです。しかし、仏さまが誓われた約束は破られることなどありません。阿弥陀さまは、「助けて！」という私達の心からの叫びを決して聞き漏らすことなく、誰しも平等に私達をお浄土へと救い導いて下さるのです。今年一年も、そんな阿弥陀さまのお誓いを信じて、共々にお念仏に励んで参りましょう。

合掌

(林田康順)

連 載

会いたい人  
関 容子



撮影／タカオカ邦彦

ある寒い夜に勘十郎さんがお洒落な細いマフラーを首に巻いて現れたことがあった。渋いオレンジ色で、シッポの先と尖った口のあたりだけが白い、キツネの襟巻。スコットランド製だそうだが、これは苦み走った伊達男の伊達男にしか似合わない。

そう言えば勘十郎さんの楽屋のれんは、狐に因む演目（たとえば『義経千本桜』の狐忠信とか）のときなど、自ら描いた優美な狐が染め抜いてあるし、いつか見た薄茶色の羽織の背中には狐が丸まっているデザインが刺繍してあって、勘十郎さんの風雅な遊びところに感じ入った。

ついでに言えば、ゴルフのホールインワン記念に勘十郎さんが配ったバスタオルには、お得意の漫画でご満悦のゴルフ狐が刺繡されているし、海外公演の折はあちこちで狐グッズを探し求めるのが何よりの楽しみの一つであるという。

「私が狐が好きになったきっかけは、本物の

ではなく人形の狐がうちにあったからなんです。子供のころ、それだけ見てたら気持ちわるいなあと思いました。劇場で、目の前で鮮やかに遣いはるのを見て、将来自分もあんなに遣えたらいいなあというんで、だんだん好きになったんです。狐の役で特に好きなのは『千本桜』の狐忠信と、『本朝廿四孝』の奥庭狐火の段の八重垣姫ですな」

八重垣姫の出の前に、諏訪大明神のお使いである白狐びやくこが登場する。この狐人形は勘十郎さん自前の「マイ狐」だそうだが、神秘的な野性の動物が活き活きと躍動する様を遣ってみせる勘十郎さんの真剣な眼差しが印象的だ。

「狐を狐らしく見せるには、まず頭とシッポを下げる。非常に警戒心の強い動物です。でね、耳を立てて絶えず周囲に気を配っています。生きた狐の動きをよく観察したいんですが、動物園の狐は狭いところで寝てばかりいますし。宮城県白石の蔵王キツネ村にい

楽屋で人形をチェックする勘十郎さん。文楽は遣い手と人形の両方を楽しめる



ろんな種類の狐、銀狐とか北狐とかまっ白い  
ブラチナ狐とかを、百匹くらい放し飼いにし  
てるところがあるそうで、いつか行つて、狐  
を抱いてる写真撮りたいと思つています(笑)。  
あるとき旅先で銀狐が売り物に出ていて、値  
段を聞いたら五万円。よっぽど買つて帰ろう  
かと思つたんですが、あとの世話が大変やろ  
うし、人間にうつる病気の菌を持つてるかも  
しれないんですね、後ろ髪引かれる思いで諦  
めました」

狐をじつと見つめて思案する勘十郎さんの  
姿が目に見えるようだ。

先頃のスイス公演の際も、スイスからの移  
動中に、ついに本物の狐に出遭つたという。

「牧草の中からこちらのバスのほうをじつと  
見てました。嬉しかったですね。私の役が八  
重垣姫だったので、日本の白い狐と、スイス  
の赤い狐と、記念写真が撮りたいなあ、と一  
瞬思いましたけど、だめでした。」

公演では、この白狐が登場する前に本火の

狐火を出すんですけど、チューリッヒでは消  
防の監視が厳しくて、ちよつとやり難かつた。  
でも舞台袖の暗がりに待機している私の狐に  
向つて、その消防士さんが手の平を差し出し  
たんです。あ、餌をくれるつもりやな、とわ  
かつたんで、私は狐に喜んでエサを食べる仕  
草をさせた。開演二分前のサーブिसです。で、  
その後の監視の目が、少しゆるやかになつた  
ような気がしましたね(笑)」

勘十郎さんの狐好きは徹底していて、狐の  
役は全部遣つてみたいそうだ。

「葛の葉(くずのは) (『蘆屋道満大内鑑』) とか、玉藻前  
 (『玉藻前囃子』) とか、白百合 (『雪狐々姿  
湖』) 有吉佐和子作) とかはまだやってない  
んです。それぞれ狐の特徴が出せる面白い役  
なので、是非そのうちやりたいと思つてます」  
勘十郎さんには自作の文楽作品が四つある  
が、そのうち二つまでに狐が出てくる。

『鈴の音』は、河童が拾つた鈴を友達狐の首

につけてやるが、その音のせいで猟師にねらわれることになる。

「河童の背に乗って池に逃れるんですが、まるで狐が池に浮いてるように見えるところが受けてます。河童がその鈴を取ってやって、ポーンと放り上げると木の梢に引っかかって、風が吹くとカラカラと鳴る、といったもので、子供向けに作りました。

『桜物語』というのは、子供を残して死んだ母親が桜の木に生まれ変わって、子の成長を見守る話ですが、狐が桜の花に化けたりするんです。

『ひょうたん池の大なます』は、大なますを釣り上げた男が格闘の末、獲物に逃げられる、という短い話ですけど、幼稚園や小学校でこれを一番多く上演しています。

『端模様夢路門松』は、ツメ人形……女中とか村人たちとか、その他大勢の端役で一人遣いの人形のことで、そのツメ人形が三人遣いに出世した夢を見る、という話。舞台裏

を見せるので、小道具や舞台下駄が積んでるのが見えたりするのが面白い」

多芸多才の勘十郎さんだが、まだ実現していない夢もある。

「ええ、狐を主人公にした絵本を出すことです。おかげさまで、ちばてつや先生のご推せんで漫画家協会会員にもなれましたね」

ところで文楽人形遣いは、立役遣いと女方遣いとに分れるのが普通だが、勘十郎さんの芸域は幅広く、豪快な立役も、美しい女方も、チャリという三枚目役も、総て得意技で、歌舞伎で言えば「兼ねる役者」。

「父（先代勘十郎）は立役専門で、簀助師匠は女方遣いの名人。せっかくそこで足やら左やらで修業したものを活かさないのはもったいないですからね。しかし両方遣うというのは、『構え』も、使う筋肉もまったく違いますから、かなりしんどいことなんです」

勘十郎さんが父の名を襲いだのは平成十五

年四月、五十歳のときで、父の死後十六年が経っていた。

「襲名の話は突然簀助師匠からいたっていて、びっくりしました。文楽の世界は歌舞伎と違って世襲制ではないんです。父の名を継ぐ権利は父のお弟子にあつて、私にはない。もし私が襲名するとしたら、簀助師匠の前名の桐竹紋二郎かな、と思つてたし、いや、一生吉田簀太郎で十分とも思つてたので、大きな立役の人形を遣うのを得意としていた父の名を継ぐ自信は全然なかったです。私はそのころはまだ女方遣いでそんなに大きな役もつていなかったし、『ふにやふにやの勘十郎』ができるんやつたら困るなあ、と思つてました。

しかし、当時八十五歳になつていた母親のために母親の名を継ごう、と決心すると、師匠は素早かったです。これまで遣つたことのない『絵本太功記』十段目の光秀という大役が私に振られて、師匠の先輩の玉男師匠には十次郎を、文雀師匠には初菊を頼んでくれ

て、ご自分は光秀の妻操に出て、周りをしっかり固める手配をしてくださった。私は初役の武智光秀と鎧人形と悪戦苦闘したり、あちこち挨拶回りに歩いたり、大変な思いをしましたが、あとで思えば名前が私の背中を押してくれて今があるような気がします。総て簀助師匠のおかげです」

伝統芸能の世界に身を置く人たちの師匠思いの姿をしばしば目にしてきたが、文楽の人たちにはそれがとりわけ強く感じられる。

たとえばこんな話にも。

「ずっと以前ですが、師匠が『累』<sup>かさね</sup>を遣うときに、茨城県の水街道<sup>みづかど</sup>の近くにある法蔵寺の累のお墓に、バスで無事と成功祈願に行つたんです。ドシャ降りの日で、人形をぬらさんようにビニールをかぶしたりしてたので、バスの中へ私物を置いてきてしまった。お賽銭を弟子に借りて、写真撮ったりして帰って、翌日の舞台稽古です。玉男師匠の与右衛門との立廻りで、うちの師匠が傘をパツと回した

2013年1月の家族と2人のお弟子さんが入った集合記念写真。現在は2人のお孫さんが増えている。右下は娘さんの愛犬「きなこ」



のが私の左の眼に当たった。私は左を遣って、稽古やから頭巾かぶってないのでまともに当たったんですね。それと同時に足遣いが踏んだ足拍子が私の左足を踏んだんです。そのとき、あ、昨日の百円を返してなかった（笑）、と思いましたね。しかし怪我したのが累と同じ左眼と左足で、ゾツとしましたけど、すぐにこれで師匠の代りに厄を果たしたと思ったからええことやん、と思い直しました」

勘十郎さんは、初めは何となく入ってしまった文楽だったが、今では「これ以上好きなものはない」と言えるまでになった。

「好きな仕事につけるといいうくらい幸せなことではないです。そのかわり膝も腰も左肩も指も、ほぼ全部ですね（笑）、ガタガタになってきましたけど、好きな狐を存分に遣ったり、手負いの役がだんだん弱っていく経過を細かく計算したり、舞台が本当に楽しくて、つくづく幸せやと思います」

先日、私は古い筋書を入れた箱の中から昭和二十三年九月東劇、大阪文楽座引越興行というのを見つけた。『先代萩』御殿の段の切場語りが豊竹山城少掾、三味線が鶴沢清六、乳母政岡が吉田文五郎で、一子千松は桐竹紋二郎とあった。簀助師匠の少年時代なのだろう。私も少女で、化石のような文五郎が動くのが不思議で、その顔ばかり眺めていたのを思い出した。

筋書に安藤鶴夫が「文五郎の顔」という一

文を載せている。

「眠ったやうな顔をして、小幕を出てくる文五郎の顔も、山城少掾の日本一の顔と共に既に得難い存在である。

人形の背後に、人形遣の顔があつて、それが邪魔になるどころか、その顔があつてこそ、より一層人形が生彩を放つといふ人形遣の顔は、吉田文五郎でもう最後であらう。」

私がかねがね思っている出遣いこそが文楽の醍醐味というのが証明されたようだった。

でも、顔は文五郎で最後、というのには異議がある。

人形と共にあつて生彩を放たせる、勘十郎さんの立派な顔があるではないか。

（この項おわり）

御宿とメキシコを結びつけたもの

# 友好の絆

第八回

森清鑑

## ロドリゴ、白杵へ

ウィリアム・アダムスに建造させた初の外洋船を提供するという家康の破格の好意に対し、ロドリゴは、恐縮して申し出る。「豊後<sup>ぶんご</sup>白杵<sup>うすき</sup>に漂着した僚船、サンタ・アナ号の様子を見てみたいと思います。この船が傷んで駄目なら、ご提供の船を使わしていただきます」と。「そうか。それもよからう。それなら白杵までの道中の安全を手配してやろう」。

この最初の会談で、家康は「貴国には優秀な技術を持つ銀採掘技師がいるという。数十人我が国に派遣してくれば、相当の報酬を払う」とロドリゴに申し出ている。この具体的な外交提案は、家康のスケールの大きさを如実に示している。家康はスペインとの交流、互恵関係を望んでいるのである。「再び駿府<sup>すんぶ</sup>に戻りましたら、両国の交流について意見を申し上げます」ロドリゴは答える。こうして、彼等一行は、白杵に向かった。家康の命令が

行き届いており、行くところ、行くところ、歓迎の嵐。東海道を西へ。京都に着く。

## 京都。方広寺大仏

ロドリゴは、京都の広さと格調のある町並み、建築美、どれをとっても自分の知る限り世界最高の処と評価。彼は、方広寺の大仏と秀吉の墓、豊国廟の印象を目にしたまま見聞録に書いている。

方広寺の大仏。「それは想像を遙かに越える大きさの偶像でした。同行した長身の日本の方に登ってもらい、大仏の親指部分を抱いてももらいましたが、両腕は四十センチも足りませんでした。これは同行の人々も見えたことでもあり、決して嘘ではありません。しかも、著名な画家が完全に描いたにしても、この大仏の美しさには、とてもかなわないと思います」。「大仏殿はまだ建造中でした」。秀吉が晩年、最初に造った大仏殿と大仏は、大地震で崩壊し、秀吉亡き後の一六〇六年、

秀頼が再建着工祈願。ロドリゴが見た一六一〇年には、銅製の巨大な大仏の原形は完成していたようで、これを囲む巨大な大仏殿は、工事が始まったばかり……の様子が覗<sub>のぞ</sub>かれる。この大仏の再建には、家康も協力しており、事実、大仏の表面に貼られる板金は、江戸で造らせている。秀吉が最初に造った大仏殿の大きさは、高さ四十九メートル、南北八十八メートル、東西五十四メートルという巨大なもの。ロドリゴが見たとき、同規模の大仏殿の再建が始められていたわけである（大仏殿は今の豊国神社が立つ位置にあった）。この大仏と大仏殿の大きさは、奈良東大寺の大仏を上回るものであり、「京の大仏」として全国の人々に轟いた。大仏殿を含む当時の方広寺境内の規模は、現在の方広寺、豊国神社、京都国立博物館、妙法院、智積院、三十三間堂を含む広さであった。そしてロドリゴ参詣の四年後に、大阪の役が始まり、豊臣家は消滅。方広寺も全て灰燼に帰す。だが、江戸期

に入って、木造の大仏と大仏殿だけは再び再建され、京の大仏として評判であったが、これも火災により焼失してしまった。そうした意味で、ロドリゴの見聞録は、大変貴重なものである。

### 豊国廟

ロドリゴは、方広寺から阿弥陀ヶ峰山頂まで続く三十万坪に及ぶ豊国廟にも訪れている。「参道は白玉石が敷き詰められており、両側に石灯籠が一定間隔で並び、夜には灯がともり、壮観である。この参道が終わると、阿弥陀ヶ峰に登る、長い石段がある。これらの周囲には壮麗な僧院が建ち並び、石段を登り切ると、また壮大な御堂が建っている。正門は、金銀を磨いた見事な透かし彫りが施され、巨大な柱で支えられている。その様は、イスパニアの大聖堂を想起する」。

これらは貴重な証言である。なぜなら、ロドリゴが見た四年後、家康は方広寺鐘銘事件

を起こし、大阪の役が始まり、豊臣家は一掃

され、ロドリゴが見聞した、方広寺も秀吉廟も、全ての建造物が焼き払われ灰燼に帰したからである。家康は、これら全てを歴史建造物として残せなかったのであろうか。時代は揺れていた。方広寺と秀吉廟は、豊臣の精神的支柱である。彼等が決起するとしたら、ここが起点になる。そうならば、家康の真の目標たる、安定した全国平定、持続する平和の実現は不可能。家康はそう判断したのであろう。そこで、大仏と大仏殿だけは再建したのである。しかし、家康死後、江戸時代に入つて五十年後、これも地震で倒壊。壊れた大仏は、寛永通宝に化ける。そして再び、木造大仏が造られたものの、一七九八年、大仏殿に落雷。全てが灰燼に帰すことになる。明治になって、明治天皇は方広寺のみを復活させ、荒れ果て、苔むし、剥き出しになった秀吉の墓台に、巨大な五輪塔墓が再建され、墓に至る、長い石段ができる（五百六十五段）。そ

れが現代の姿である。

ロドリゴは、壮麗極まりない豊国廟に参拝したが、その時、ロドリゴの心に蘇つた悲劇があつた。それは、一五九六年、一隻のガレオン船が暴風で土佐の浦戸に漂着。この時、聖職者を目指す、乗船者の一人の若者が捕らえられ、他の二十五名とともに長崎で磔刑されたのである。後の文学、絵画で語り継がれる「日本二十六聖人殉教者」。処刑したのは秀吉である。そんな思いにとらわれたものの、「それにしても太閤様の御廟は、壮麗の一語であつた」と述べている。

ロドリゴは、所司代、板倉伊賀守の案内で、「天皇の住む、御所」も見ている。そこは、江戸や駿府の城に近い印象だが、華麗なだけでなく、高い格式を感じる。「板倉は、私をとても歓迎してくれ、話は弾んだ。彼は、イスパニアの様子をしきりに尋ねる。それに私も丁寧に答えた。喜んだ彼はそのお礼にと都のことをくわしく話してくれたのである。京

都を見て、私はイスパニアの首都より優れていると正直思った。

### 三十三間堂

ロドリゴは、三十三間堂にも案内されている。そこでは馬場が三列取れるくらいの広さに驚いたが、それにも増して、千体もの観音立像を拝観し、日本人の造る、彫像の美しさ、凄さに声を上げる。また、日本には、釈迦、阿弥陀を軸とした宗派が三十五もあるが、全く対立がないと板倉から聞き、感慨ひとしおであった。しかし、これら仏教宗派がこぞつて、カトリックの修道士を追放するよう、將軍に請願したと聞き、一抹の不安を覚える。だが、將軍秀忠は「三十五もの宗派が争いもせずに存在しているのだから、それが三十六になったとて困ることはあるまい」と退けたという。彼は、家康と秀忠の考え方に感じ入る。

余談になるが、古代ローマ帝国は、領土を

広げた地域の固有の神を、全てフォロ・ローマーノに集め、自由に祈れるようにした。この姿勢があつたからこそ、大ローマ帝国ができたのである。ロドリゴが聞き及んだ、秀忠の宗教的姿勢は評価すべきもので、彼は、このすてきな国で、キリスト教の布教を願った。

### 伏見から大阪へ

都の美を堪能し、ロドリゴは、京都伏見に赴く。華麗な伏見城。秀吉が町割り、開発した城下町の景色を楽しみ、「町は都より狭いものの、すばらしい施設の数々」との感想を述べている。伏見から一行は船に乗り、大阪に出る。宇治川、淀川の船旅。快適そのもの。その景色の良さに、彼は、スペイン、セビリアの光景を思い浮かべた。

### 大阪、そして白杵へ

大阪では、サンフランシスコ派の神父の家

に泊まる。「大阪の人口は二十万人。ここは日本で最も美しく立派な町と言えよう。民家はおしなべて二階建て、構造的にも優れている。そして海産物も潤沢な町」。その後、一行は、船で瀬戸内海を渡り、豊後に辿り着く。ロドリゴは、「毎晩、陸に上がって眠った」と記す。

豊後臼杵に着くと、彼は、目的の僚船、サント・アナ号の状態を調べる。この時、同船は陸揚げされており、子細に見ると相当傷んでいる。しかももともとこの船は老朽船。馴染みのスペイン人船長は、私達の帰国に提供しても良い……といってくれたが、ロドリゴは、

この船で太平洋を横断するには危険すぎると感じる。

確認を終えると、ロドリゴ達は再び駿府に引き返す。道すがら彼は改めて思う。「道中、どの町も道も清潔。ゴミ一つ落ちていない。どこでも食べ物や潤沢にある」。こうして駿府に帰ったロドリゴは、なんとここで数ヶ月も滞在することになる。

【参考資料】

「ドン・ロドリゴの日本見聞録」 安藤操 谷口書店  
「条約から条約へ」 墨田関係史ノート。在日メキシコ大使館。  
アニマル上原。

古き伝統技  
三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

古島法衣店

服社  
有会

〒111東京都台東区元浅草4の2の1  
電話(03)3842-11289  
振替00180245231

小説 快僧渡辺海旭

# 壺中に月を求めて

前田和男

第五十五回

第二部

ライン  
来江の古城遥かなり

盟友・萩原雲来 その5



★前号までのあらずじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリア人ハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ・カレル・ギー伯爵と出合い刺激を受ける。ストラスブルクに戻った「半年先輩」で同じ宗門海外留学生の荻原雲来から、ヨーロッパ初の比丘であるニャーナティロカルの存在を知らされ強い興味を覚える。一方、当初の留学期限が切れ何とか延長を許されるなか、雲来はケンブリッジ大学の蔵書から仏教聖典「瑜伽論」菩薩地の原典を発見する快挙をなし博士号取得をロイマン教授から勧められ、海旭にもそろそろ成果が求められていた。

## 畏友・荻原雲来を故国に送る

スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表を終えた渡辺海旭と、片や英国はケンブリッジで仏教聖典の原本発掘の快挙をなした荻原雲来の二人がロイマン博士夫妻に会食に誘われて一年ほどがたった、明治三十八年（一九〇五）八月。早いもので、二人がライン河畔の古都に学びはじめて六回目の夏がめぐってきた。海旭にとっては嬉しさが半分、寂しさが半分。荻原雲来と共に師事したロイマン博士にとっても、また嬉しさが半分、寂しさが半分の大きな出来事が起きた。

雲来がロイマン教授からの強い勧めでめ得太く博士号を取得、それを土産に故国日本へ帰ることになったのである。浄土宗学東京支校以来の朋友である海旭も、また恩師であるロイマンも、わが事のように誇らしい反面、別れは身内のそれのように辛かった。

ロイマンは、雲来のために歓送の祝宴を張ってくれた。場所はいうまでもない、ストラスブルク大学前の料理店「ゲルマニア」。雲来を歓送するには、ロイマンが学生たちを毎週のように誘っては酒と料理を楽しみながら大いに議論をかわした、思い出のつまったここ以外には考えられなかった。

全員がそろったところで、ロイマンが言った。「ラギハラ君、博士号、おめでとう」

「この上ない榮譽をいただきました。先生のご高配に心から感謝を申しあげます」と雲来ははにかみながら頭を下げると、面接試験の状況を説明しはじめた。それによると、ドイツ人の受験生たちが一様にシルクハットに燕尾服という威儀を正した出立ちで、見るからに緊張に凝り固まっているのに対して、雲来だけは山高帽子に着古したフロックコートでさながら気楽な茶会によばれる客。いっぽう選考委員も、さながら茶会の主人として雲来に接する風情であつたという。ちなみに宗教

史専攻の某老教授などは、日本の宗教や仏教のことを形ばかりに質問して「ずいぶんと有益なお話をきかせていただいてありがとうございます」と礼を言つたというから、選考とは名ばかりであつたらしい。

「そうか、そうか」とロイマンは眼を細めて言つた。「君ならとつくとれていて当然だつたが、なにしろ、肩書きはいらんの一点ばりで、六年がすぎてしまった」

「申し訳ありません、先生に氣をもませて……」と雲来が答えかけたところへ、海旭が割つて入つた。「オギワラの最大の手柄は『瑜伽論』のサンスクリット原本としてはおそらく最古のものを、大学の古書の山から発見したことです。そこから先がオギワラの真骨頂。発見しただけでも大手柄なのに、遠路はるばるケンブリッジの図書館に出かけていって、あそこにある漢訳の『瑜伽論』とつき合わせて、サンスクリット本の欠損を補つたのだから、それが博士論文と認められるのは当然のこと

です。面接試験なんぞは、形式にすぎません」  
ロイマンの評価も同様だった。後に雲来の博士論文について、こうコメントを書き記して高く評価をしている。

「荻原氏の踏み入ったのは全く新しくかつある意味で氏みずから発見した分野である。というの、その写本は甚だ等閑に失した状態で、——現存の紙葉 (Blatter) は大部分破損され、頁数がなく (unmeriert) 全く乱雑で順序のないもの——荻原氏のヨーロッパに将来した博識によって初めて現存の写本目錄をもとに、漢訳文献中に原文内容を確定し得たものである」(原文ドイツ語を訳出、西村実則『荻原雲来と渡辺海旭』所収)

ロイマンは満面に笑みを湛えて、「ロンドン大学のペンドール博士やライデン大学のスパイヤー博士から、君のところには凄い弟子がいてうらやましいと誉められて、私も鼻

高々だったよ」

両博士はいわば仏教梵語学の大関か横綱というべき存在だったが、以来、雲来には二人から著書を贈られたり、質問がくるようになった。雲来は無冠・無位ではあるが、留学数年にして、斯界ではすでに一級の学者であり、したがって、海旭の言う通り、博士号など望めば即座に授与されても何の不思議もなかった。しかし、雲来は十二分の力量があるのに二、三分しか見せない。自らを売ることが盛んな今日では実に貴重な人物であり、ここがまたロイマン教授も海旭も雲来を高く買うところだった。

どちらが「師」か「弟」か

そんな尊崇してやまない無二の友が帰国、海旭だけが残されることに、内心大いなる不安と淋しさを覚えずにはいられなかった。思わず海旭は、「だ、大の男が、な、何を子供じみたことを」と日本語でひとりごちたが、

すぐに我れに返ってかぶりを振るとロイマンのグラスにビールを注ぐとして、ロイマンの顔にもうかない表情が浮かんでいるのを見ととった。

ロイマンも心に相当な衝撃を受けていると海旭は感じとり、あるとき留学仲間の足立文太郎から「おい、渡辺、あの二人の關係は別格無比だぞ」と言って聞かされた目撃談を思い出した。

足立とは東京帝大医学部を卒業して海旭よりも一年早く文部省の官費留学生としてストラスブルク大学医学部に留学、二年前にオランダのライデン大学を經由して帰国。後に、血管系の解剖研究によってドイツ赤十字名誉章、ドイツ最高学会会員に推薦されるなど、北里柴三郎、志賀潔、野口英世らと肩を並べる学問的業績を上げることになる日本医学界の気鋭の逸材だった。

その足立が、ストラスブルク在学中、たまたま雲来の研究室に立ち寄って、故国のたわ

いもない思ひ出話に花を咲かせていたところへ、ロイマンがドアをノックしてたずねてきた。医学と宗教学とでは分野はちがうが、ロイマンの令名は大学中に轟いており、また白鬚をたくわえた学者然とした風貌に気おされて、足立は思わず威儀をただした。一方の雲来は軽く会釈をしただけだったが、足立を驚かせたのはそれからだった。

師であるロイマンが丁寧な口調でこう言ったのだ。「ヲギハラ君、君に教えを乞いたいことがある」

そこから先の会話は専門的な仏教用語（おそらくサンスクリットのような）がちりばめられて足立には意味不明だった。雲来が本箱の中から読み古した經典を取り出すと、あちこちページを繰りながら説明をはじめた。ロイマン教授は丁寧にメモをとっていたが、やがて深く頷くと、「いやあ、ありがとう。いつもながら君の学識には恐れ入る。ほんとうに助かった」と言って、なんと弟子に

お辞儀までして去っていった。

情景を語り終えた足立は海旭に言った。

「あのときは驚いた。いったいロイマン先生と萩原雲来はいずれが先生なのか弟子なのかわからないほどだった。思うに師弟相互に助け合って研究を進めて居たものと思われる。いやはや、あらまほしき師弟関係だ」

足立の話をうけて海旭は羨ましく思うと同時に内心妬心が起こるのをこらえるのに苦労して、こう返した。

「い、今の僕の力量では、ロイマン先生とそんな師弟関係を結ぶとは望むべくもない」と言っただけでため息をついて続けた。「せ、せめて日本に帰って、弟子をもつとしたら、見習いたいものだ」

まさにロイマンと雲来の関係は理想ともいふべきもので、ストラスブルクで二人の聲咳に接した学僧である大橋戒俊も、後にこう回顧している。

「その学風、態度は全く口教授の再現としか思えず、二教授に親しく手を取って戴いた私などは、その性格の大部分ですが、余りに相似して居るのに一驚を喫して居るのである。一子相伝と雖もこれ程瀉瓶しゃびょうの妙は伝へられまいと思へる。随って若し萩原先生が時代を異にして居られたならば、人はこれを眺めて口教授の生れ変わりと云ひ得やう」

（大橋戒俊『口教授の眺められた萩原先生』）

萩原雲来がロイマンの「生まれ変わり」とは言いえて妙であった。だからこそロイマンにとって雲来の帰国は、息子を失う、いや自分の身体の一部を失うに等しい悲しみなのだろうと、海旭はロイマン教授の顔にうかぶ翳かげりを認めて、改めて思うのだった。

（この項つづく）

# 謹 賀 新 年

平成二十七年

浄土門主  
総本山 知恩院 門跡第八十八世

伊藤唯真

大本山 増上寺  
法主

八木季生

大本山くろ谷金戒光明寺  
法主

高橋弘次

大本山 百萬遍知恩寺  
法主

服部法丸

〒606 8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院  
法主

真野龍海

大本山善導寺  
法主

阿川文正

浄土宗宗務総長

豊岡鏖尔

法然上人御誕生地  
浄土宗特別寺院

美作 誕生寺

〒709 3602 岡山県久米郡久米南町里方八〇八  
TEL 〇八六 (七二八) 二一〇二  
FAX 〇八六 (七二八) 二一六二

(学)大乗淑徳学園  
理事長

長谷川匡俊

〒174 8645 東京都板橋区前野町五、五、二

学校法人 淑徳学園  
淑徳S.C中等部高等部

理事長 麻生諦善  
校長

大鹿山弘経寺前住職

金田進徳

〒302 0023 茨城県取手市白山二、九、二八

吞龍上人祈願所  
浄土宗十八檀林霊場会

蓮馨寺

住職・浄土宗議会議員 衆原恒久

〒350 0066 川越市連雀町七、一  
電話 〇四九 (二二二) 〇〇四三  
FAX 〇四九 (二二二) 〇六七六

# 謹 賀 新 年

平成二十七年

白本尊阿弥陀如来

静岡  
**宝台院**

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

**浄土寺**

住職 阿川正貫

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺

**飯田實雄**

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五  
電話〇二六五(八三三)二二六〇

清水湊

忠高山  
**實相寺**

〒112-0002 東京都文京区  
小石川三丁目十四番六号

無量山  
**傳通院**

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

家康公祖母の旧地

玉桂山  
**華陽院**

住職 堀田卓文

**勝願寺**

〒365-0008 埼玉県鴻巣市本町八・二・三  
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

**一心寺**

〒543-0002 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九  
電話〇六(六七七二)〇四四四

本應寺 隠老

**熊谷靖彦**

〒849-1411 嬉野市塩田町馬場下甲六六二・一

九品阿弥陀如来

**浄真寺**

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三  
住職 清水英碩

定義如来

極楽山  
**西方寺**

〒989-2313 仙台市青葉区大倉上下一  
電話〇一三(三九三)二一〇一  
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>  
Email: [sashouji@johg.or.jp](mailto:sashouji@johg.or.jp)

岩淵

天王山  
**正光寺**

東京都北区岩淵町三十二・十一

# 謹賀新年

平成二十七年



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」  
住職 **飯島英徳**

北海道室蘭市  
満岡寺・善行寺  
(0143) 22 - 4677・44 - 2695

梅窓院  
住職

**中島真成**

東京都港区南青山  
2-26-38  
電話 03 (3404) 8447  
ホームページ  
<http://www.baisouin.or.jp>

**成田昌憲**

大吉寺住職

〒154・0017  
世田谷区世田谷四・七・九

**佐藤成順**

願行寺

〒140・0004  
品川区南品川二・一・一二

**大室了皓**

光取寺

〒141・0021  
電話〇三(三四四一)八三八四  
東京都品川区上大崎一・五・一〇

**佐藤良純**

光円寺住職

〒112・0002  
文京区小石川四・一二・八

**高德院**

鎌倉大仏殿

〒248・0016  
電話〇四六七(一一)〇七〇三  
FAX〇四六七(一一)五〇五一  
鎌倉市長谷四・二・二八

**加藤昌康**

森巖寺

〒155・0032  
世田谷区代沢三・二七・一



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。  
どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

●黒

〔特選〕黒々と島の夜明けや鳥渡る

石原 新

日輪が正に水平線から現われようとするとき、逆光になる孤島は黒々と突っ立つ。日の出の明るさに逆らうことで、存在を示そうとするのである。ただ日が昇るに従って、次第にあたりになじんで行くのだが。

〔佳作〕農学部のおいし黒牛秋うらら

齊田 仁

石で焼く黒毛和牛や豊の秋

新島 達郎

黒猫の濡れて戻りし秋しぐれ

山口 信子

●板

〔特選〕体育の日のまな板が立っている

有馬亜紀子

体育の日だから運動会など、何かの行事があるのだろう。朝早くから弁当をつくって、家じゅうで出かける。あとにはまな板がぼつ

んと立っている。一枚のまな板が一家の行動をしつかりととらえているのである。

〈佳作〉

寡黙なる若き板前鮎鍋

佐藤 雅子

板敷きに足をなげ出す囲炉裏かな

井村 善也

猪皮を戸板に干して過疎の里

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉

# 難聴の耳より冷えて目覚めけり

吉崎美和子

寝る時は、よく聞こえるほうを上にしていたのかも知れない。あるいは聞こえない耳を上にするほうが眠りやすいのかとも思う。とにかく難聴のほうを上にして目覚めたのだ。部屋の空気は冷えびえとしている。

〈佳作〉

揺れるでもなく新宿の猫じやらし

小林 苑を

小春空少女が呉れし鉛の味

片岡 灯一

夕しぐれ綿嚙んでいる抜歯あと

岩田 満佐



# 靴底自由題

兼題

浄土誌上句会の  
お知らせ

## 誌上句会〈編集部選〉

### ■黒

古き世の黒髪みごと母の艶  
幼な児の黒子まぶしや小春空  
黒き空遊子も馳せる枯田道  
秋の句が黒板拭きで消えにけり  
ふくらんでいて十月の黒靴  
黒く澄む水の井戸あり秋の昼  
秋の夜の黒鍵だけで弾ける曲  
黒板のあいあい傘や秋うらら  
石で焼く黒毛和牛や豊の秋

### ■板

弱虫の空手習いし板を割る

飯島英徳 飯島英徳  
佐藤雅子 佐藤雅子  
森 懐人 森 懐人  
工藤 掉 工藤 掉  
村田 篠 村田 篠  
濱口慶子 濱口慶子  
有田由紀 有田由紀  
松田瑠美 松田瑠美  
新島達郎 新島達郎

締切・二〇一五年一月二十日

発表・『浄土』二〇一五年四月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

## 応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内  
月刊『浄土』誌上句会係

## ■自由題

はり板に群れて休める秋茜  
板さんの休日に咲く彼岸花  
秋祭り果て鉄板の焦げ残る  
野分なか波のかたちのトタン板  
白菊の戸板の上で売られけり  
三秋の踏み板朽ちておりにけり

二十年涅槃の猫になりにけり  
好物のハタハタを供えて亡父想う  
秋の宵静かに消える赤き月  
秋の蚊を挟んで岩波文庫なり  
秋めくと人に言われてそう思う  
秋暑し背広の胸に金平糖  
消火器の並んで秋の集会所  
紫紺野牡丹ここから河のはじまりぬ

飯島英徳 飯島英徳  
佐藤雅子 佐藤雅子  
森 懐人 森 懐人  
長谷川 裕 長谷川 裕  
和田精作 和田精作  
村松芳郎 村松芳郎  
田宮秀美 田宮秀美  
長谷川 裕 長谷川 裕

森 懐人 森 懐人  
笠井亜子 笠井亜子  
湯上有彦 湯上有彦  
進藤統治 進藤統治  
工藤 掉 工藤 掉  
佐々木奈美 佐々木奈美

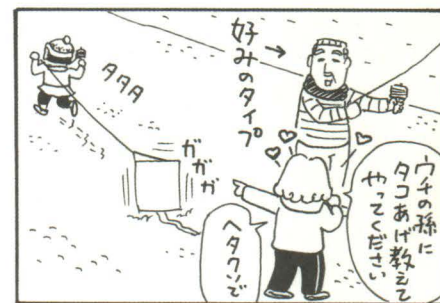
# さっちゃんはネッ

かまちひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。  
 福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞

(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・



## 編集後記

月白く西の空にカラス啼く

岱潤

国が替わるといこうも認識が違うのかというのを、中国に行つて感じた。ガイドをしてくれた湯さんが日本人は気の毒だとおっしゃった。なぜと聞き返すと、日本はアメリカに負けてから七十年にもなるのに、まだアメリカの植民地のままだとおっしゃるのです。

確かに安保条約を結び続け、米軍基地の状況を考えれば、そう見えるのかもしれない。そして中国では先の戦争の時の、国際法に違反する南京虐殺や都市への絨毯爆弾などへの検証が進んでいるのに対し、日本では広島・長崎はもとより、都

市への爆撃に対して、アメリカにに対し抗議の言葉も聞かれない。一般市民への機銃掃射は許されるはずがないのに、アメリカのしたことはすべて目をつむつてしまつてきた。ここに民族差別が見えるとおっしゃるのです。差別はしている側には見えない、差別されてる側が異議を唱えない限り差別は表出ししないのです。差別されていることに鈍感な国民は、差別することにも鈍感になつてしまふかもしれない。それはとても怖いことだと思ひます。

南京の博物館で抗日戦争の話を縷々伺つた。その資料からすれば日本人としてはとても信じたくないし、嘘だと思ひた

いことだけれど、大変な虐殺があつたことは否定できない事実だつた。  
今年終戦から七十年目を迎える。事実をしっかりと認識した上で、隣国とつきあつてゆきたいと思う。  
(長)

編集スタッフ  
長谷川岱潤  
斎藤晃道  
佐山哲郎  
青木照憲  
村田洋一

浄土 八十一巻一月号 頒価六百円  
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可  
印刷 平成二十六年十二月二十日  
発行 平成二十七年一月一日

発行人 佐藤良純  
編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区愛宕園四七西明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三七八)六九四七  
FAX〇三(三三七八)七〇三六  
振替〇〇一八・八・八二八七

雑誌『浄土』  
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)  
巖谷勝正(目黒・祐天寺)  
魚尾孝久(三島・願成寺)  
大江田義彦(仙台・西方寺)  
加藤昌康(下北沢・森巖寺)  
加藤亮哉(五反田・専修寺)  
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)  
桑原恒久(川越・蓮馨寺)  
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)  
佐藤成順(品川・願行寺)  
佐藤良純(小石川・光園寺)  
東海林良雲(塩釜・雲上寺)  
須藤隆仙(函館・称名寺)  
高口恭行(大阪・一心寺)  
中島真成(青山・梅窓院)  
中村康雅(清水・実相寺)  
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)  
野上智徳(静岡・宝台院)  
藤田得三(鴻巣・勝願寺)  
堀田卓文(静岡・華陽院)  
本多義敬(両国・回向院)  
真野龍海(大本山清浄華院)  
泷 博之(網代・教安寺)  
水科善隆(長野・寛慶寺)  
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>  
メールアドレス [hounen@jodo.ne.jp](mailto:hounen@jodo.ne.jp)

蓮

門

句

会

勝崎裕彦  
(東京新宿・香蓮寺)

これからへ発菩提心の初明り

堂内も初勤行に威儀正す

寒行に持戒修善を誓うなり

山崎龍道  
(熊本天草・遣迎寺)

御忌法話師の御作の如意もちて

法然忌磯を清めてたたむ波

三三五五集ふ参詣法然忌

行正明弘  
(福岡糸島・正覚寺)

湯気の中声の飛び交ふ御忌の庫裡

海のもの畑のもの下げ御忌詣

天寿まで日課称名法然忌

佐山哲郎  
(東京根岸・西念寺)

堂縁を濡らすがごとく初明り

燈明の微かに揺れて淑気かな

このたびは黒如の御忌を厳修す

石丸晶子先生の

本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が

文庫本となりました。

ほとけの  
慈悲は  
いつの世にも、  
誰のもとにも



法然。その光に出逢い、闇をこえ、  
“あたらしいいのち” に生きた  
貴族、武士、庶民たちの物語

# 月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

〔問合せ・お求め〕 浄土宗出版

〒105-0011東京都港区芝公園4-7-4

TEL:03-3436-3700 FAX:03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>